

人体を材料にした薬

薬学雑誌 1902 年度(明治 35 年)256 頁など

当時、全国各地で墓が暴かれ生首が売買された。黒焼きが梅毒の特効薬とされたのだ。明治 35 年は東京でも大阪でも人頭黒焼き売買事件があり、この様子が薬学雑誌大阪地区通信(194 頁)にある。「ずいぶん素人の間にて喧伝するも道修町側には馬耳東風に付せり。しかる所以は幕政時代はともかく今は泰西薬物の需要盛んにして、かかる素人向け薬品を取引する輩はきわめて下層の薬種商に限り、これらは常に別視する仲間なり」。

しかし長い間バイブルであった明の李時珍による本草綱目は、薬物を材料別に分類して全 52 巻、この最後の第 52 巻は人部としてヒト由来の医薬品を扱っており、明治時代は漢方医も庶民も信じていたのである。日清戦争では、大陸で人頭の製造で大もうけした業者もいた。

西洋科学を信奉する日本薬学会会員は迷信とみて相手にし

なかったが、忌避するあまり知識のない読者もいたのだろうか、翌 3 月号(256 頁)には 4 ページにわたって人体を材料とする漢方薬について本草綱目の解説が載った。生首の黒焼きは天靈蓋という。頭垢、歯垢、胆石、淋石、人糞、人尿、人精、陰毛、人勢(陰莖)、紫河車(胎盤)、紅鉛(婦人月水を乾固したもの)など 37 種。

その 3 か月後の薬誌、愛媛県の地区通信(620 頁)は、「…密売し、また薬種商に販売せしこと発覚し 5 月 30 日その筋において墳墓発掘に対しては重禁固 1 年 6 ヶ月罰金 10 円、人頭骨を他の薬剤に混し密売したるは売薬規則違反として罰金 30 円に処せられたり」江戸時代は何の問題もなかったのが法律制定で一転、犯罪となり新聞沙汰になっただけで、生産者も消費者もなんの悪びれたところがない。気味が悪いというのは現代人、健康人の感覚である。効く薬がほとんどなかった頃は皆、神仏迷信に頼るしかなく、必死な者は何とか金を工面して自分のため、愛する者のため、不治の病の「特効薬」を手に入れようとした。

小林 力